

報告：中国語「速読」トレーニング

齋藤貴志

0.はじめに

本学中国語専攻では長きにわたり、中国語の「速読」トレーニングを行う授業が開講されている。「速読」とは、あるまとまった中国語の文章を、意味をよく理解しながら、スムーズかつリズムカルに一定の時間内で「速く読む」練習方法のことである¹。

今年度より、著者が当該授業を担当することになったのだが、実は、著者自身もこの「速読」トレーニングに興味があり、いつか授業で実践してみたいと思っていた。

本稿では、2018年度後期開講科目「中国語上級演習ⅡA」で、本学中国語専攻3年生（14名）²に行った速読トレーニングについて報告する。

1.ねらい

本学中国語専攻3年生後期といえ、大半の学生が半年もしくは1年の留学期間を終えて帰ってきた時期である³。この「ある程度」中国語に慣れ親しんできた学生たちになぜ速読トレーニングを行ったのか。本章では、速読授業のねらいを述べる。

1.1 発音矯正と中国語のリズムの獲得

留学を経験したことによって、中国語を話す機会は日本にいた時よりも格段に増えている。しかし、その時に発音がおかしいからといって、わざわざ会話を止めて矯正をしてくれる人はごく少数である。また、学生が話すとしても、長くて複文レベル、短い場合は単語レベルであり、まとまった文章を話すという機会は留学中であってもほとんどない。3年生後期ぐらいに

なれば、発音を意識した状態であれば、正確に発音することは可能であろう。しかし、まとまった文章を、ネイティブの話す速度で正確に、となると留学を経験してもなかなか難しい。

また、学生たちの中国語を聞いていると、「中国語らしく」聞こえないことがある。個々の単語の発音は問題ないのに、いざまとまった文章となるとなんだかしっくりこない。これは、中国語のリズムが身につけていないことが考えられる。

このような状況から、速読トレーニングをとおして、発音矯正および中国語のリズム獲得をねらいの1つとした。

1.2 リスニング力向上のための土台作り

留学を経験したことによって、中国語を耳にする機会は日本にいた時よりも格段に増えている。しかし、だからといって必ずしもリスニング力が上がるわけではない。これは、留学帰りの学生の成績⁴をみてもそうだし、著者自身も実感している。

日本人中国語学習者のリスニングの難点として、以下の2点がよく挙げられる。

- ①速くて聴きとれない。
- ②単語は、見ればわか（ったつもりにな）るのに、聴くとわからない。

速読トレーニングでは、1分間に約250文字～300文字のスピードで読まれるスクリプトを使用する。自分がそのスピードで読めることになることで、そのスピードと同様もしくは以下のスピードで話されるものは、速いと感じることはなくなり、「速くて聞き取れない」という状況は少なくなる。また、それをとおして、文字と音声の結びつきができ、さらには、意味と音声の結びつきも強化される。

もちろん、この速読トレーニングだけでリスニング力が向上するわけではない。しかし、少なくとも向上するための土台作りにはなると考えている。

2. 授業の進め方および評価方法

教材は、鈴木誠編『速読中国語』の CD44～CD57 (14 個の スクリプト) を使用し、1 回の授業で 1 スクリプトずつ進めた。予習として、該当箇所の速読練習と、授業日前日 23:50 までに 該当箇所の日本語訳を提出することも課した。授業内では速読の 検証および日本語訳の確認を行った。時間配分は、速読検証 60 分、日本語訳の確認 30 分を目途に授業運営を行った。また、 授業の 8 回目と 15 回目を予備日として、再チャレンジの機会 を設けた。評価方法は、速読検証は 70 点あり、指定秒数で読 めれば 5 点、+1 秒、-1 秒で-1 点とした。この 5 点の中 には、発音の評価は含んでおらず、速度のみで得点化した。発音 点として別途、15 点設けた。検証直後に、発音に関するフィー ドバックは気づく限り行った。また、前日までの日訳課題にも 別途、15 点設けた。

3. 実践報告

当該授業をとおして気が付いたことを以下の点から報告す る。

3.1 授業へのモチベーション

毎回の速読検証がそのまま成績に直結するので、欠席はない だろうと思っていたのだが、その見込みは見事に外れた。ほと んどの学生は毎回しっかり参加していたのだが、一部の学生は 欠席が目立った。参加点を考慮に入れてなかったのが、プラス マイナス 4 秒以内で読み上げないと得点にはならない。それが 影響したのだろうか。また、再チャレンジの機会を設けたのだ が、それがあるのであつていいかと思ったのか。毎回地道にト レーニングをしてきたが、今一步足りなかったという学生が いることを考慮し、再チャレンジという機会を設けたのだが、こ

こちらの説明不足により、こちらが意図している方向とは少しずれてしまった。来年度は、参加点を加味するか、再チャレンジの基準を厳格にするかなどの対策をたてる必要がある。

3.2 字速と文字数

以下の表は、指定秒数、文字数、1秒あたりの平均字数および合格率をまとめたものである。1秒あたりの平均字数が5.0のスク립トが、CD50、CD 55、CD 57と3回あったが、そのうちCD50とCD55の2回は合格率が0.07、0.07と圧倒的に低かった。これらは1分間に約300文字読む速度で読み上げているスク립トなのだが、このあたりになるとかなりの練習量が必要になる。また、文字数が300文字を超えるスク립トに関しても字速に関わらず、合格率は低かった。そこまでの長さを読み上げる「体力」は留学帰りといえどもまだついていないのであろう。

CD	44	45	46	47	48	49	50
指定秒数	57	59	53	66	56	59	54
文字数	248	249	256	264	265	267	269
字数/秒	4.4	4.2	4.8	4	4.7	4.5	5
合格率	0.36	0.57	0.64	0.71	0.71	0.64	0.07
CD	51	52	53	54	55	56	57
指定秒数	60	60	67	68	68	92	80
文字数	276	278	301	316	343	385	398
字数/秒	4.6	4.6	4.5	4.6	5	4.2	5
合格率	0.93	0.79	0.57	0.36	0.07	0.21	0.29

3.3 発音の諸問題

発音の問題については、鈴木（2008）ですでに指摘されているが、今回もいくつか気になる点があった。全体に言えること

だが、第1声が少し低いために、高低差がなく、平板調に聞こえることが多かった。個別には、「hu」とそれと関連する「hua」、「huo」、「huai」、「hui」、「huan」、「hun」、「huang」の音を日本語の「ふ」の音、つまり無声両唇摩擦音 [ɸ] で発音している学生がいた。1年時から、これらの発音は日本語の「ふ」で代替しないようにと注意してきたが、速読のように、発音に意識を割くことができない状態になると、いつもの癖が顔を出してしまうのであろう。また、3声+2声の声調パターンがまとまった文章の中ででてくると、くるってしまう学生もいた。いずれの問題も、1年生の発音指導で口を酸っぱくして言い続けていることなので、学生たちも頭の中ではわかっているはずだ。しかし、身につけるとなるとなかなか難しい。ある著名な先生が「発音よければ半ばよし」とおっしゃっていたが、まさにその通りだと思う。

3.4 日本語訳と速読

日本語訳の提出も課していたので、学生たちの日本語訳と速読の関係についてもみることができた。日本語訳はとてもすばらしいのに、その文章を速読するとなると、スムーズに読めない学生が数名いることがわかった。その学生は、中国語の構造もしっかりとれていて、日本語訳もしっかりしているので、なんとかスムーズに速読してもらいたいと思い、速読の効用、練習の仕方や読み方のコツなどを話し、家でも練習してみるようにアドバイスした。文字（視覚）からの文章理解はしっかりできているのだから、速読を通して、文字と音声の結びつきが強固になれば、リスニング力も向上すると考えているからだ。結局、その学生には効果的な処方箋をだすことはできず、なんとももどかしい思いをしたと同時に、語学教員はどこまでフォローできるのかについて考えさせられた。

4.おわりに

今回の授業実践を通して、速読トレーニングは留学帰りの3年生にとっても、字速や文字数のハードルを上げれば、とても歯ごたえのあるものだと再確認できた。

学生個々としてみた場合、それぞれに課題は残っているが、全体としては、懸命に取り組んでくれたと思う。一方、教員側には、より一層の改善の余地はあったと反省している。

①発音面（含中国語のリズム）のフィードバック

今回は、著者自身、意図的に速度面に意識をもっていたため、発音面に細かい意識が及ばなかったところがあった。発音面の顕著な問題は気づくことができても、細かい点は見落としている可能性が大きい。とくに、中国語のリズムに関するフィードバックは、ほとんどできていなかった。

②リスニング力の向上にいかに関わりつけるか

前述したとおり、速読トレーニングだけではリスニング力は向上しない。今回は、速読検証に日本語訳の検証もしたのでかなり欲張ったかたちになった。これは、リスニング力の向上には、正確に文を分析し理解する力が必要であるという考えからなのだが、結果的に、速読検証も日訳検証どちらも中途半端という形になってしまったかもしれない。じっくりやるのであれば、検証するスクリプトの数を減らし、速読検証に1コマ、日訳検証に1コマというようにするか、もしくは、他の先生と連携して、講読の授業を行うなどの工夫が必要かもしれない。

また、ねらいとして挙げた、速度への慣れや文字と音声の結びつきの強化についても、学生へのアンケートやそれに関するテストを行っていないので、現段階ではなんとも言えない。

上記の改善点を踏まえたうえで、今後も継続的に実践報告ができればと考えている。

今回、授業で速読トレーニングを実施するのにあたり、前麗澤大学教授の鈴木誠先生に直接ご教授いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

【注】

- 1.詳細は鈴木 2007、鈴木 2008 を参照のこと。
- 2.当該学生は、1 年生から速読のトレーニングを受けてきており、2018 年前期にも著者が担当した「中国語上級演習 I A」を 9 名が受講している。
- 3.この学年は、14 名中 1 名が 1 年留学、10 名が半年留学を経験している。
- 4.2018 年前期まで留学中だった 5 名（内、半年 4 名、1 年 1 名）の 2018 年 12 月に実施した第 41 回 TECC のリスニング平均点は 268.6 点（500 点）であった。

【使用教科書】

鈴木誠編 2012 「速読中国語」

【参考文献】

『通訳メソッドを応用したシャドウイングと速読で学ぶ中国語通訳会話』長谷川正時・長谷川曜子著、スリーエーネットワーク、2007 年

鈴木誠 2007 「中国語『速読』の試み」、『麗澤大学紀要』第 85 巻

鈴木誠 2008 「中国語『速読』の実践」、『中国研究』第 16 号、麗澤大学中国研究会

鈴木誠 2009 「中国語教学雑記（1）～「速読」の授業～」、『中国研究』第 17 号、麗澤大学中国研究会